２つの話

札幌市医師会
いまいホームケアクリニック
川端　大史

私がまだ学生であった頃、朝の早い時間帯に旭川の街中を車で走っていると、信号待ちで歩道からジャージ姿の中年女性に窓越しに声をかけられた。なんでも駅まで送ってほしいとのことであった。特に何も考えずに女性を後部座席に乗せ駅まで車を走らせると、仕事で帯広から来ていたが財布を落としてしまい帰りの電車賃がないとのことであった。５分ほどで駅に着き、帯広までなら五千円はあったほうが良いのかなと思いながら財布を開いてみたが、中には千円札と一万円札が一枚ずつ入っていた。少し迷ったが､困っているのだからと一万円札を手渡し、連絡先の電話番号と住所を書いてもらいその場で別れた。

当時下宿生であった私は夕食時にホールで談笑していたところ、他の下宿生から「昨日道端でジャージ姿の女性からお金を貸してくれと言われたが断った。見るからに怪しい女性でそんな奴にお金を貸すわけないだろう」と話をされた。その時は平静を装ったが、食事後に連絡先に電話をかけてみると「おかけになった電話番号は…」。交番に被害届を出したが、その後連絡はない。

当時は人の善意を裏切られたことへの怒りと、まさか自分がという気持ちが交錯していたが、詐欺に遭うときはそんなものなのだなと実感した。むしろ今後の人生を考えた時に一万円の授業料で済んだと思えば高額ではないのだろう。

月日が経ち、私は研修医として疾患の診断・治療に関する知識や技術を学ぶことに精進していたが、研修過程で指導医から患者の生物医学的な問題に限らず心理・社会的な問題も把握しケアにつなげるアプローチの重要性を教えられた。それまでは患者の真の受診目的や家族・仕事の話など治療に関係がないと思っていたが、今ではそのような心構えで診療することで、実際に患者の人生の中にさまざまな健康問題がつながっていることを強く実感する。限られた診療時間の中でも毎回１つ会話を膨らませて継続する気持ちを大切にしている。

10年以上経ち、もう顔もよく覚えていないがあの方は現在どのようにお過ごしなのだろう。当時どのような生活をされていたのだろうか。過去の自分とは異なる心境にいることは、単に年齢を重ねたからではないように今は感じている。

オピニオンリーダー

札幌市医師会
札幌中央病院
市原　浩司

私は元来無趣味な人間でした。学生時代はずっと柔道に明け暮れてあっという間に６年間が過ぎ、社会人になってからは仕事が趣味のようなものでした。2018年から現在の職場でお世話になっていますが、その時の偶然の出会いが表題に関係します。

とある患者さんと外来で雑談をしていた時のことです。「そういえばさ、先生って自衛隊のことどう思う？」と聞かれ、「うーん、私自身は岩見沢の出身で駐屯地もありましたし、震災の時に活動していた姿を見てずいぶんと感銘を受けました、感謝していますし応援していますよ」と答え、「じゃあさ、オピニオンリーダーって仕事してみない？」と提案があり、「え？　僕ですか、というか何ですかそれ？

僕でもよいのであれば構いませんけど」。突然のことでしたが、こうして私は第11旅団のオピニオンリーダーを拝命したのでした。

第11旅団とは陸上自衛隊北部方面隊に属しており、北海道の政治・経済の中枢である札幌市を含む道央と道南の防衛・警備および災害派遣を担任しています。担任地区は56個の市町村（石狩、空知、後志、渡島、檜山）であり、人口は約307万人（全道の約56％）で面積は約17,000㎢（全道の約1/5で四国４県に相当します）です。平成30年に、我が国の有事に即応し、実効的かつ機動的に抑止・対処が可能な機動旅団として編成された部隊となっており、中心は真駒内駐屯地です。

ところでオピニオンリーダーの仕事ですが、自衛隊活動を見学しながら広く皆さんに広報するというものです。つまるところいろいろな催しがあると招待いただいて楽しむのが実際です。これが完全にハマりましてすっかり私の趣味（？）となりました。音楽隊の演奏会に行ったり、観閲式や射撃訓練を見学したりと人生で初めての経験をしています。駐屯地内の売店で買い物もできますので、わが家には迷彩柄のグッズが増えています。

外から見て感じるのは、自衛官皆さんの「日本が平和な国であってほしい」という気持ちと、「それを自分たちが守るんだ」という強い使命感です。私には到底務まらないでしょうけど、厳しい規範の中で任務を全うされる皆さんの姿に感銘を受けます。我々が安心して日常生活を送れるのはこうした皆さんの「万が一への備え」のおかげなんです。これからも末永く応援していけたらなと思いつつ、紹介してくれた患者さん（大変お元気！）にも感謝しているのでした。